

## 災害経験の継承と発展

継続的な人材交流と学術研究を通じて

関西大学 社会安全学部

教授 越山健治



### 1. 阪神・淡路大震災の経験

1995年1月は大学4年次であり、卒業論文執筆の山場であった。地震発生により、研究室の学生の卒業論文執筆は一時的に中断され、個々の生活の安全が確保され次第、災害調査への参画が始まっていった。私は、当時大阪在住であったため、自宅被害はなく、自宅周辺における生活自体にも問題がない状態であったが、被災地と連絡がやりとりできるようになった3日後に大学に入り、調査活動に加わるようになった。研究室活動における当時の詳しい記録や手記が参考資料に残っており、今でもその記録を見ると風景の一端を思い起こされる。

これら研究室調査は、研究室OBを含め数多くの学外の研究者や、他大学の学生が加わる形で行われた。国の研究機関の研究者や、コンサルタント、他大学の教員、学生たちと共同して現地調査を行い、データを整理し、分析するという時期が1~2ヶ月程度続いた記憶がある。

この経験を整理してみると、災害調査という場で作られた一時的な共同体の中で、現地で得られる生のデータを収集し、分析する共同作業を通じ、議論される内容やそのデータの解釈、分析方法の習得、結果から導かれる考察、今後の防災対策への展開、現在の課題の模索など、すべての情報が知的刺激であるとともに、被災地という現場を目の前にした研究者の姿という点からしても学んだことが大きい経験であったといえる。

さらにもう少し紐解くと、「調査活動を通じた知識・経験の伝達過程」のひとつであったと認識できる。当時の研究室所属の学生は、大学院2年から学部4年生総勢10名程度で、災害研究の専門性を持ってい

るとは到底いえない「初心者」集団であったといえる。その中で「被災地の大学の防災研究の研究室の学生」というわずかながらの自負と責任を頼りに活動に従事していたことを思い出す。たくさんの先生陣、実務者、研究者から、調査時だけでなくいろいろな会話、活動を通じて、たくさんの学びがあり、それが現在の自分の原点となっていると感じられる。その経験知を得ることができたのは、当時の現場の空気感と、状況の共有感を含め、学生という立場を超えた「被災調査の協働の場」があったからだと考える。

一方、同じ時期に行われている被災者支援のボランティア活動をしている人々との違いに葛藤する場面もあった。「こんな被災地の状況下で、直接助けにならない研究・調査をされていていいのか」という問いかけはずっと持ち続けながら活動していた記憶がある。また、これらは調査支援に来てもらっていた同世代の学生も共有するものだった。つまりこの「場」は「心情」の共有・伝達にも強く寄与していたと感じるところである。

表1 これまでの一連のイベント経過

1991年4月	神戸大学工学部環境計画学科入学
1994年4月	同 環境計画学科 室崎研究室配属
卒業研究：サッカースタジアムの避難計画に関する研究	
・主に建築物の避難計画、群衆流動の研究を実施	
・研究室活動の中で、北海道南西沖地震や雲仙普賢岳災害の分析補助などを通じて知見の取得	
1995年1月	阪神・淡路大震災発生
1995年4月	神戸大学工学部博士前期課程（修士）進学
・研究室調査活動のうち、主に市街地火災調査、避難所状況調査、仮設住宅居住者調査に参画。研究報告、論文の作成。	
修士論文：大震火災地における復興計画に関する研究	
・国内の地震火災復興を比較し、実行経過、計画技術、空間分析を通じて都市復興過程のあり方を考察	
1997年4月	民間シンクタンク 入社
1998年10月	神戸大学大学院自然科学研究科 助手
1999年	トルコ地震調査団参加（建築学会）

200年	日本・トルコ・台湾地震研究チームに参加
2001年9月	博士(工学)取得
2002年4月	人と防災未来センター 研究員
2010年4月	関西大学社会安全学部 准教授
現在に至る	

## 2. 研究活動を通じた経験の継承

私の災害・復興研究の変遷および問題意識については、参考文献<sup>2)</sup>を参照いただきたい。その研究活動においてさまざまな研究者とネットワークを作る機会があり、まさにそれが「経験の伝承」という場となっていると感じている。その中でも自分の糧となっているものを3点示したい。

1点目は、先に書いた阪神・淡路大震災の調査研究を通じた人的ネットワークである。未曾有の現代都市災害の調査研究活動だけでなく、その後の貴重な研究成果の発信を通じて、多くの先輩および同世代の研究者、さらに他分野の専門家と交流する機会があり、その結果、知識を高度化させ、また多くの人と共有することができた。この機会は自分にとっては、学びの場であり、たくさんの経験や考え方、意識を「伝えてもらった」という感覚が強い。また、同時に同世代の研究者と水平的につながることができる機会であった。

2点目は、1999年台湾・トルコなど海外災害事例の共同調査から、さらに2004年新潟圏中越地震及びその後の災害研究へと展開する「調査チームによる被災地研究」の場を通じた知識共有である。学生ではなく、研究者として同世代の人々となつたり、現場の状況を捉えながら、学術的な議論・分析を通じて、交流関係を持つことができた機会であった。また同時に、単なる学術調査だけではなく、被災地に阪神・淡路大震災の教訓情報(いい点も悪い点も含めて)の伝達という活動を通じた「支援」の意味合いも有していた。学術的な横のつながりの発展、強化と共に、学術と実践をつなぐ「機能」を学ぶ貴重な経験であった。

3点目は、人と防災未来センターの実践を通じた知識・経験の共有である。2002年に設立されたセンターの1期生として所属した身であるが、多様な研究分野を持つ多様な研究者の集まり、さらに社会実装を

実行する自治体職員や、組織運営の責任主体である国・地方自治体の存在など、さまざまなステークホルダーの中で、知識や情報をやりとりする場は非常に混乱し、難しく、その分エキサイティングであったと感じている。研究分野において、それぞれの研究者の持つ専門領域で交わされる暗黙的な知識がない状態で、互いの研究について議論するコミュニケーションは、当初は相当困難であった。しかし、これらを継続することで、次第に相互理解につながり、さらに進むとこれまでの自らの領域では生まれにくいような、新たな気づき、創出されるアイディア、共同実行するチャンスなどに触れる経験をした。この感覚は、研究者-自治体職員・国の職員の間でのコミュニケーションでも存在した。設立当初は、いろいろな物事を決めていく段階であり、それぞれの関係者が持つ既存の知識・経験を基盤とした議論が繰り広げられ、当初は対立事象であった状態から、次第に新たなものを作り出し、決めていくという場に変化していった。そのプロセスを通じ、互いの背景、思考回路などを、徐々に共有することとなり、次第にセンターの研究の全体像が形作られ、本日の活動に至るといふ歴史を持っていると感じる。

これらをまとめると、私自身はセンターで、縦(垂直的)と横(水平的)のつながりに、研究者ではないななめのつながり(実践する人、被災者など)といった複層的な知識・経験の共有・伝承の場であったと考えている。つまり、災害派遣や現地調査、研究部における共同研究、他部・他組織と連携した活動などを通じて、多様で重層的な経験・知識に接した機会として捉えている。

## 3. 次世代への教訓の継承

現在は大学教員という職を経て、学生への教育活動という新たな場を手にはしているが、なかなか難しい問題であることを実感している。自らの学びの経験から指摘できることは、ある程度互いの暗黙的な共有があり、そこに「場」を設定し、互いの知識・経験を組み合わせ、議論し、何か新しいことを「生み出す」とい

うプロセスにおいて、災害教訓は継承されていくのではないか、という点である。「教える」「教わる」関係では「学び」にならないので、そのハードルを越えた地点にこそ、知識・経験伝承の鍵があると感じている。

**参考文献**

- 1) 神戸大学工学部建設学科室崎研究室（1995），1995.1.17 阪神・淡路大震災 見た・聞いた・感じた 調査ボランティアの記録
- 2) 越山健治（2016），建築・都市計画分野におけるわたしの災害復興研究と分野における深化，日本災害復興学会誌 復興 通巻 第17号（Vol.7 No.5），pp.25-30.